

# 日本災害情報学会「廣井賞」

(廣井賞表彰審査委員幹事 天野 篤)

■ 2010年廣井賞授賞式・受賞記念講演：2010年10月23日 関西大学社会安全学部

## 1. 2010年廣井賞

### ■社会的功績分野

#### 1) 「FM ながおか」長岡移動電話システム

大災害時、コミュニティ放送ならではのタイムリーな被災者支援放送を行い、その体験や教訓を踏まえた地域防災力強化につながる実践活動で、全国のコミュニティFM局の範となっている。

#### 2) 「FM-salus」横浜コミュニティ放送

6年半にわたり防災専門家のインタビュー番組「サロン・ド・防災」を継続するなど、大都市域のコミュニティFM局として、平時における防災啓発の役割をよく果たしている。

### ■学術的功績分野

#### 3) 立命館大学歴史都市防災センター教授・神奈川大学日本常民文化研究所非文字資料研究センター主任 北原糸子氏

近世・近代の貴重な史料を掘り起こし、災害文化を現代社会につなげる先駆的学術研究を進められ、災害情報分野で顕著な功績をあげられた。けもの道を歩み新たな研究分野を確立した姿は、廣井脩先生の研究に対する精神にも重なる。



のベースというのは、真ん中に被災者がいるということです。すなわち被災者の生活再建、こういったものを明らかにする、それを教訓として伝える努力が必要なわけです。この学会は、過去のそういった教訓を将来に生かす、災害を待っているのではなくて、災害に先行してその被害軽減を図ることが大きな目的です。そういった中で情報の重要性。大災害の中から、私たちの社会はどのように復活してきたかというプロセスを明らかにしていくことの重要性は、今回の受賞で非常に大きいと言いますか、力を得ていただいたのではないかと思います。

## 2. 授賞式

### 1) 河田恵昭会長

本学会は今から12年前に発足しました。災害情報の重要性は15年前の阪神・淡路大震災がきっかけで、そのあと廣井先生を代表に学会を設立しました。廣井先生は、実は私と同じ昭和21年生まれです。廣井賞の盾に彼の写真が刷りこまれています。彼だけ全然歳をとっていない。私どもだけが歳をとっていったというわけです。彼の功績を私達の学会できちんと残していきたいと考えたのが廣井賞です。

今年はふたつの分野で3件の授賞を迎えました。社会貢献分野の2件はコミュニティFM放送です。ひとつは新潟で震災および水害を経験してその教訓を発信するという努力。もう一つはこれから起こる災害に対する努力です。また学術研究分野では、我が国ではほとんど評価されてこなかった歴史資料の解析という、これから情報の研究をやっていく上でベースになるような、本当に大切な分野です。これまで研究者もほとんどいないところを開拓してこられた方が受賞しました。今ある情報だけではなくて、過去の情報、特にこの災害情報分野の研究



### 2) 藤吉洋一郎委員長

今年は4件の推薦の中から3組に廣井賞を差し上げることになりました。毎年、選考委員会の中で議論になるのですが、やはり新しい分野を切り開いたとか、なるほどそういう災害情報の役立て方があるのかというようなことを始めた人たち、いわばパイオニアの役割を果たした人々を表彰していこうと。ですから、同じようなことは自分たちもやっているよと後から名乗りを挙げて、それはもう同じことをやっているというだけでは駄目で、さらに新しいすそ野を開いている、そういう貢献を期待しようということを再確認したような次第です。

今回、社会的功績分野では、二つの団体に賞を差し上げることになりました。まず「FM ながおか」です。新潟県の長岡という所にありながら、2回の大地震、それから水害という、短い間に度々の大災害に遭って、その災害の中から本当に地域に役立つ放送というものを開発してこられた。そればかりではなく、全国のコミュニティ放送の皆さんに、どのようなことを届けたいのか、日頃からどのような準備をしておけばいいのか、そういった情報をきちんと伝えていくということにも取り組んでこられ、全国のコミュニティFM局の範となる日常活



動をしておられることを高く評価したわけです。

それからもうひと組、これもコミュニティ放送ですけれども「FM サルース」。こちらは大会横濱に拠点を置き、まだ起きない災害に備えて今から皆さんはどんな心掛けでどのようなことをしていけばいいかを、「サロン・ド・防災」という防災の専門家を中心としたインタビュー番組を通じて6年半続けてこられている。特に、昼夜の人口構成ががらっと変わる大都会で、コミュニティ放送がどういう役割を果たしていけるか、そういう新しい試みを続けておられることを評価したわけです。

それから、学術的功績分野。立命館大学歴史都市防災センター教授で、神奈川大学日本常民文化研究所非文字資料研究センター主任研究員の北原糸子先生に差し上げることにしました。学術的功績分野は、若手の研究者の皆さんの励みになるような、なるほどこういうことを目指していけばいいのだという目標になるような、そういった業績をあげられた方に差し上げようというつもりです。これからも皆さん奮って推薦をしていただきたいと思います。両分野、団体、個人とも自己推薦でもかまいません。よろしくお願ひします。

### 3. 受賞記念講演

#### 1) 社会的功績分野 (団体) 「FM ながおか」

長岡移動電話システム(株) 代表取締役社長 脇屋雄介氏

ただいまの廣井賞受賞、本当にありがとうございました。ちょうど6年前の10月23日夕方、あと2時間少々でしょうか。私たちの新潟県中越地域に中越地震が起き、同じ年には大水害がありました。そしてそれから3年もしないうちに中越沖地震がありました。中越大震災では、多くの人が亡くなりました。今日この日、同じ土曜日にあの大災害が起きました。そんなことで、今日は私たちの中越地域、長岡市内でも山古志、それから震度7の川口等で慰霊祭、いろいろな行事が行われている真っ最中です。

話の内容は、まず中越大震災の起きた時のもよう。二つ目に「FM ながおか」がどんな災害放送をしたのか。そして三つ目に、この6年間で私たちの小さな地域のコミュニティ FM 放送がどのように変化をしてきたのかを簡単に紹介したいと思います。

中越地震、皆さまもご存じのように、死者が68名、重軽傷者が4,805人。それから3年もしない2007年の7月16日には中越沖地震、柏崎市、それから長岡市などで、死者15名、重軽傷者2,316名という大災害がありました。新幹線が初めて脱線した模様。それから長岡市内の妙見で、大規模な土砂崩れで何台か車が埋まりました。皆川優太ちゃんが何とか生きて助かったということ。そのお母さんやお姉さんが亡くなったということ、皆さんもご存知かと思ひます。



同じく中越沖地震です。国道8号線、長岡から柏崎に行くメイン道路です。この崩れた所、これが私の町内です。そして私の家も全壊でした。まさに放送している中で、家がこんなに全壊だとはまったく想像もしませんでした。取材で柏崎に行く途中、家のすぐ近くまで山が崩れて土砂が押し寄せていました。もうパソコンから全部落ちて、足の踏み場もありません。寝室では木のベッドが真ん中で真っ二つに折れていました。重くて上げられない状況です。これが昼でなくて真夜中であつたら、おそらく私はここにいなかったかもわからない状況でした。

二番目に、中越地震に対してどのような放送をやったのかということです。まず地震が起きた直後には、当時仕事をしていた男性の職員が、直ちに放送をしました。被災地ではまったく情報がない。停電でテレビも映らない状況の中で放送を続けました。全国の皆さんはテレビ等で情報は分かったかもわかりませんが、私たち被災地はまったくそのような情報がありませんでした。そんな中でいろいろな放送を続けました。停電、それから5箇所まで火災がありました。私も途中から駆けつけたんですけども、火災があちこちでありました。消防署の前を通ったら、消防車、救急車はすべて出払っていました。これは被災者のための放送に徹するべきだということで、本当に困っている人のため、まさしく生前、廣井会長が言っておられた、災害放送は被災者のための命を守る放送をやるんだということに徹しました。暗い中、震度5以上が20回以上、非常に不安な夜でした。そんな中で放送を続けることができました。

時間を追ってどんどん放送の中身は変わってきます。安否情報や外国人向け放送、コンビニやガソリンスタンドの開いている状況、お風呂の状況、ごみの収集など、いろいろな放送をどんどん入れました。3、4日後でしょうか、私が地元の地方紙を見たら「ラジオなんか大嫌い」という記事が、小さな見出しであつたのです。震災の最中だったんですけども、あつと思ってその記事を読みました。何のことかなと思つたんですけども、地震の中で、これは小千谷の小学生の手記だったんですけども、情報が何も入らない中で、真っ暗な所、家が全壊してみんな外で唯一の情報手段はラジオだった。ローソク、それからブルーシートをかけながら、みんなでラジオを聞いていた。その中で、自分の大好きだった友だちが、おじいちゃんと一緒に家の下で押しつぶされて亡くなったという放送をラジオで聞いたということです。

「FM ながおか」とは決まっていますが、ラジオの情報しかない中で、一番つらい情報がラジオから流れた。こんなうそつきラジオは大嫌い、という内容でした。

さて、それでは三つ目に、地震を経験した私たちが、そのあとどのように変化をしてきたのかということを紹介したいと思います。この6年間、われわれの小さな地域のコミュニティ FM 放送局はずいぶん変わりました。私どもの長岡市長は、全国市長会の会長です。私も行政

と一緒に市民のために放送を続けました。どうあるべきかということが、いろいろなことで勉強になりました。そして長岡方式、地域の小さな放送局だけれども情報伝達としては重要な役目をするんだということで、新潟県長岡市の復興基金をもらいながら、現在、震度7となった川口に中継局を着工中です。コミュニティFM放送としては最大、現在10箇所の中継局をつくっています。そしていま防災本部と連携をしながら、その10箇所すべてにカメラを設置しました。360度ズームもできます。山古志だったら山古志の山が全部、山の頂上から見える所に中継所があります。海だったら海の津波の情報も直ちに市の本部に映せるような工事をやっている最中です。

次に緊急地震速報。これも気象庁といろいろな連携をしながら実験をやっていました。そして緊急地震速報を直ちに入れ、現在稼動しています。先日の福島県の地震、それから新潟県の上越のほうで震度4がありました。長岡でも震度3、4を表示して、確実に動作をする。市民からも非常に助かったと言われています。

次に紹介したいのが緊急告知ラジオです。これは12年くらい前に開局したときから、今まで広域の放送局で進めていたEWSという方式がコミュニティ放送に面白いと、あちこちでその推進を呼びかけてきました。地震のあと見事に採用し、長岡市では今1万台以上、全国にも普及しています。さらに高度化をするシステムも現在開発中です。このラジオは、災害時に市役所、消防署2箇所から連絡の緊急ボタンを押すと、大きな音で直ちに市民に対して避難の情報を流すことができます。この告知ラジオを月1回、1日の日に試験放送をやっていきます。そして年に4回、長岡市で防災訓練をやっていきますが、ちょうど明日、合併をした小国町であります。朝8時に大規模な地震が発生したという想定で、第一報は「FMながおか」の緊急告知ラジオが町内会長の家にありますので、それが起動したら直ちに避難するという準備に入っています。そのような情報をどんどんこれからも流していきたいと思っています。

また、地震後「FMながおか」の放送内容も、ずいぶん変わりました。いろいろな放送の中で、多言語放送、海外から来ている人のための放送も、英語、中国語、ポルトガル語、やさしい日本語で、現在毎週30分番組をやっていきます。それから、地域発の防災ドラマを、防災科学技術研究所と共同でつくっています。

また、市役所、消防署からの緊急割込放送も、月2回テストとしてやっていきます。それから、避難準備情報、避難勧告、避難指示、この言葉がなかなか分かりにくいということで、三つの違いをよく理解していただくため、1分のCMを逐次放送しています。さらに緊急地震速報の導入も五つのパターンで、例えば自動車の運転中や、屋外や、大勢の集まっている所、そういう施設などの場合にはどのようにしてくださいますかというように、緊急地震速報の導入に伴い、啓発の放送も逐次入れています。

「防災一口メモ」は、防災ジャーナリストの渡辺美さん監修でJFNで放送しているものの協力をいただいて、県内はもとより私どもの「FMながおか」でも週1回3分コーナーで放送しています。このように地震の経験をしてこの6年間、いろいろな変化が見えたと思います。

私どもの長岡は、花火をかなり大規模にやっています。実はこの長岡の花火、花火師の競演とか、そういうものではありません。昭和20年8月1日に長岡大空襲で8割が焼け、そして1,500名の尊い命が亡くなりました。その8月1日の亡くなった人の鎮魂を意味して、2日、3日の2日間、長岡で大花火が上がります。そして、中越大震災、中越沖地震、ここでも多くの方が亡くなりました。その鎮魂も含めて、長岡の町の中に1kmの幅の信濃川がありますが、この川の上下2.7kmに、復興のフェニックスということで、まさにこの町のど真ん中に、花火が打ち上げられています。

これからも、生前の廣井先生の、先ほど話したような被災者のための放送に徹するのだということも続けていきたいと思っています。われわれのコミュニティFM放送、私も全国230市にありますコミュニティFM放送の防災担当、JCBAの副会長をやらせていただいています。その中で、今日も奄美のほうで水害がありました。おそらく向こうのほうでも、われわれの仲間が頑張っているかと思っています。そんなことで、これからも小さな地域の放送局ですけれども、災害時には市民のために大いに力になるものと思っています。

この度の廣井賞、誠にありがとうございました。

## 2) 社会的功績分野(団体)「FM-salus」

東急電鉄(株) 都市生活創造本部専門部長 寿乃田正人氏

このたびは大変栄誉ある賞をいただきまして有難うございました。それでは今から7年前にこの考え方を立ち上げて実際に動き始めたところからお話しします。ちょっとビデオをご覧ください。<V 映写> いまのビデオでありましたように、町の人にはほとんど防災に興味をお持ちではない状況でした。そのあと「サロン・ド・防災」という地域防災活動がどのように進んできたかをお見せします。

東急田園都市線の梶が谷から中央林間までの地域を東急多摩田園都市と言います。5千ヘクタールほどあります。ここで「多摩田園都市防災まちづくり実行委員会」という協議会を立ち上げ、「サロン・ド・防災」という誰でも集まれる防災の部屋を設置しました。ネーミングも大事だということで、みんなで集まる「防災カフェ」という案もあったんですが、ちょっとありきたり。どうせならもう少し大きな名前がいいということで、私が「サロン・ド・防災」とネーミングしました。実は、商標登録を取っています。



この「サロン・ド・防災」は、リアルな部分とバーチャルな部分を持っています。リアルな部分は、中川という所に「住まいの情報館」というのをつくり、その中に設けたスペースです。この地を舞台にして大ヒットしたテレビドラマ「金妻」が始まってから25年たちました。町並みはどんどん変わっていきます。そこで、企業と行政、市民と一般、地域住民で連携しようということで始めました。私が立ち上げました「重機ネットワーク」というのがあります。重機というのは建設機械なんですけれども、これをネットワークして、いざというときに町場の人たちが、国からの支援がある前に何とか動けるんじゃないか、そんなことを知らせるためのスペース、それが「サロン・ド・防災」のリアルな場所でした。

バーチャルな部分は、「FM サルース」の放送です。2004年1月に東京大学の目黒先生に出させていただいたのをスタートに、2010年までで総勢80名の方に出させていただきました。防災系とまちづくり系と二つのNPOに協力してもらっています。私がどちらも理事を務めさせていただいています。

皆さんは入口でこういう冊子を受け取られているかと思いますが、後ろに「FM サルース」の電話番号が入っています。その0180994841にかけると、今の「FM サルース」の放送が受信できます。電話を通して聞くということは、たとえ札幌にいても、沖縄にいても、自分が住んでいる、例えば横浜市青葉区の状況が分かる。何か災害が起きたときに、そこにダイレクトに行き着くことができるのです。「継続は力なり」ということを含め、地域の人たちに分かってもらうのが大事だと、すすき野の自治会などにも出張をして、いろいろな説明をしたり、こういう使い方があるんですよとお知らせすることを進めてきました。

渋谷駅の帰宅困難者対策という訓練がありまして、これが先ほどお見せした冊子です。昨年11月18日に行われました。訓練想定の下で、実際にこの電話番号にかけてみてくださいということをお願いしました。こちらは青葉区の「すすき野・荇子田・黒須田地区地域防災フェア」で、こちらのほうでは、もう一つの冊子を使って、これにも同じように後ろから2ページ目に番号が入れてあって、実際にかけてみる訓練をしました。

この仕組みは、NTTの「テレドームサービス」と言うんですけども、サービスの利用状況を調べますと、毎日74件程度の利用があるということが分かっています。アクセスしている場所は、横浜市青葉区が一番多いんですけども、緑区、都筑区、港北区、川崎市、渋谷区、目黒区、大田区からもアクセスがあります。年間を通して1万3千件のアクセスがあるようです。

全国どこにいても電話を経由して放送そのものが、いつでも聞けるNTTのテレドームサービス（情報料は無料）を全コミュニティFM局が採用すれば、普段は自分のお気に入りの番組をいつでもどこにいても聴くことが

できます。また、これを携帯電話会社のサービスコンテンツに加えることで、電話配信料無料サービスも可能だと思われれます。平常時からこういったサービスのあることを周知できていれば、発災時に地域を限定した有効な災害情報を何時でもどこからでも容易に得ることができるのではないのでしょうか。

それから、コミュニティFMの多文化共生社会というところで、国際交流ラウンジの小池代表からは「ラジオというのは、多言語のいろいろな言葉で話されることがとっても役に立つ」というお話をいただき、これはいい方向になったなということが分かっています。

開始から6年たって、当初は40万世帯という可聴範囲が、今では60万世帯まで聴けるようになりました。これは電波だけではなく、イッツコムケーブルテレビの可聴範囲も含まれています。3年目からは、ドキュメント化してイッツコムコミュニケーションズのケーブルテレビのウェブに載せ、今まで登場していただいた80人の先生のお話を読めるようになっていきます。また、ポッドキャストインクと言ってウェブの上からダウンロードして、放送の中身が聴けるサービスも始めました。

でももう「サロン・ド・防災」も儲からないしそろそろ潮時なのかな、本にして皆さんに差し上げて今年で終わりにしようかな、なんてことをちらっと思ったことがありました。そのとき、強力な助っ人がいまして、先ほどお話したNPOの一つ「東京いのちのポータルサイト」の理事をされている鍵屋さんという方が、アイデアをくださいました。「どうせつくるならもっと意義のある本をつくらう」と。皆さんの話は、ウェブで読めるような状態になっているのだから、絵本をつくらうじゃないかということになり、こんな本をつくりました。『まち』と言います。内容は、女の子が自分のまちを探検するもので、「まちなみ探検マップえほん」とネーミングしています。平時の防災啓発、これは想像力がやっぱり大事だと思うんです。イメージーション能力がないと、いざというときにどうしたらいいか、きっと何も考えられない。だからその前に自分のまちを歩いてみて、どこに危ない所があったよねとか、子どもと話し合いながら読める本です。最後はとっても楽しく終わるようになっていきます。たくさんの方に読んでいただけたらうれしいです。

以上です。まことにありがとうございました。

### 3) 学術的功績分野（個人）

立命館大学歴史都市防災センター教授・神奈川大学  
非文字資料研究センター主任研究員 北原糸子氏

日本災害情報学会の会員ではありますけれども、研究発表をこの学会でしたことがないという大変申し訳ない状態なのですが、この度廣井賞をくださるというので本日も



りました。私は前のお二方が受賞された防災関係の仕事ですぐ役立つことは何もやってないので、防災という大変気が引けるのですけれども、歴史関係で日本は非常に災害が多い。それから、記録もほかの国に比べると抜群に蓄積があるわけですので、そういうところから災害を受けた人間というのは、人間とともに社会ですけれども、どんなふうに立ち直っていくのかということをしちゃんと調べたい。それは日本の社会そのものを知ることだというふうにずっと感じていましたので、かなり長い間やってきたわけです。

今回は記念講演ということで、廣井さんとの関わりのなかで、私自身が廣井さんから得たもの、そういうものを少し皆さまにお伝えしたいと思います。それから、私は歴史関係ですけれども、いま伊藤先生からご紹介いただきましたように、歴史地震研究会の会長をやっています。そういうところで災害関係の人たちとコンタクトを持つということは、私自身の研究の方向に非常に大きな意味を与えていただいていると感じています。どういうことかと言いますと、歴史の場合にはひとりで研究を完結すればよい要素が非常に強いわけですけれども、私自身が災害分野の方々と連携することで一番深く学んだこと、心に刻んだことというのは、やっぱり研究の成果を社会に還元しなければ意味がない。災害の方たちといろいろな企画をすると「それはやろう」というふうに、すぐ乗ってくださるんですけれども、歴史研の人たちというのは「いや、ちょっとね」という感じで、なかなか乗ってくれない。そういうことがあって、社会に還元しようという姿勢を学んだことだし、私自身も歴史研の方々に呼びかけることを、かなり頑張ってやってきましたけれども、なかなかそういうふうには今のところっていない状態です。

それです、廣井さんに出会った経緯からお話をさせていただきますと、ずいぶん古い昔なんです。30年以上前だと思いますけれども、廣井先生の先生で岡部慶三先生という方がおられたんです。2、3年前にお亡くなりになって、廣井さんより後に亡くなったんで、大変残念に岡部先生は思っていて「これは逆だ」と言って涙を流しておられました。岡部先生から廣井さんをご紹介いただきました。その後、新聞研究所から社会情報研究所というふうに廣井さんがいたところの名称が変わった時期に、廣井さんと一緒に江戸東京博物館の災害展示のコーナーを担当することになりました。そこをやってくれと言われて、廣井さんをお願いをして、廣井さん関係の災害関係の方に声をかけていただきました。都立大の都市防災センターというのがあったと思いますけれども、その望月先生をお願いをして、また東京大学の生産技術研究所の小出治先生が、パソコンとかデータとか情報とかというものの処理をしていただくということをやりました。江戸東京博物館は設立20年になったんですけれども、今もまだそのコーナーは内容が変わらずに、変え

られない状態で生きています。20年たつと、ほとんど博物館というのは展示替えをするんですけれども、そのコーナーの一部はそのままになっている。そこでは安政の地震と、関東大震災を扱っています。それが廣井さんと一緒に仕事をした最初でした。

そのあと多分2000年頃だと思えますけれども、社会情報研究所50周年。これは新聞研究所から考えてのことなんですけれども、ちょうど廣井さんが所長をしているときだったんです。その50周年記念に、東大の総合博物館で展示をしようと。それは小野秀雄コレクションという災害系のかかわり版をたくさん集めておられた先生が新聞研究所を創立されたので、その先生のコレクション展にしようと。そういうことで私が中心になって解説をして、それをCDにして、記念品として50周年のときにお配りする、そういうようなことをしました。冊子も出しました。東大出版会から「ニュースの誕生」を出していますが、残念ながら今やもう品切れなんですけれども、ずいぶんと皆さんには好評です。というのは、全部かわら版に書いてあることを文字に起こしましたので、何かという利用されるということのようです。

それから、廣井さんにはお声をかけましたけれども、残念ながらお忙しくてご一緒できなかったのですが、河田先生、それから伊藤先生にはご参加いただきまして、千葉県佐倉市に国立民俗歴史博物館というのがあります。関西の民族は「族」ですけれども、関東の民俗のほうは、フォークロアの民俗の字を使います。その博物館で、「ドキュメント災害史、地震、噴火、津波、そして復興」という展示をやりました。そして「復興」というところにみそがありまして、歴史研の人たちをそこにに入れて、それぞれの災害で社会はどうなったのかを展示の中に盛り込むということをやりました。

災害展示の試みというのは、私にとっては大変具体的に、直接的に社会に研究成果を、歴史研究ですので今すぐに生きるというかたちではないんですけれども、社会に還元する有り様としては、大変反応が分かる。一般の人たちがどう考えているのかということとか感想も聞けるし、少なくともこの地域で昔こういうことがあってそれを克服してこうなったという過程が分かる。そういう感じがします。ともかく災害展というのは、人もまた見に来ていただけますし、それから日本の古い絵がたくさんあります。災害に関して文字で書いては表現できない部分を絵で表すのです。昔はいろいろな藩でも、御用絵師というのがいまして、高い技術を持った人が1人だけではなくて何人も雇っていました。善光寺地震でもそうですが、島原の島原大変でも、熊本藩でも島原藩でも絵図がたくさんあります。そういうふうなものを展示したり、皆さんに見ていただくと、本当に皆さんびっくりされるというふうなことがあり、災害展の展示の試みというのは、かなり領域としては面白いことではないか、効果もあるのではないかと思います。

歴博の展示では、理系の先生方15名、文系7名、歴博の先生3名というかたちで、図録もつくりました。これは津波の、東北大の今村先生に構想をさせていただいて、1階に降りていく階段を利用して、津波の高さを体験してもらおうというので、こういうふうなものをつくりました。明治三陸の30mとか20mという高さそのものはできなかったんですけども、体感的展示をしました。それから地震のほうは、善光寺地震の4mに及ぶ絵を藩主がつくっています。現在の土地と対応させて、どの範囲がどうなるのかということを経現在の地図に落とすとか、いろいろな技術と知恵を借りて、デジタル化したデータをパソコンで展示しました。それから富士山の噴火、島原の絵図があります。この絵図をつくった理由は、幕府からお金を引き出すためとか。それから浅間噴火では発掘もやっていますので、その発掘の成果もお借りして展示しました。

そして復興の最後のところでは、象潟地震の景観保存で、蛸満寺の抵抗を取り上げました。地震で象潟が干潟になってしまっ、ずっと土地が盛り上がり、藩にとっては畑になるので大変うれしいことなんですけれども、景観そのものは芭蕉が歌を歌ったような景観はもうとても望めないということで、蛸満寺さんのお坊さんは、非常に開発に抵抗するというふうなことがありました。その歴史事実を明らかにしたり、復興では、お寺がおみくじをつくってやったり、そのおみくじの模型をつくり、皆さんにおみくじを楽しんでもらいました。最後に阪神まで持ってきたかったけれども、阪神震災そのものの分析は当時はまだできませんでした。奥のほうに見えるのが阪神の写真で、何か有名な写真家に撮っていただいたものを許可を得てここに展示しました。

ともかくその後、いくつかの展示をやりました。面白いし、人の反応がよく分かる。自分の研究は研究としてやらなければいけませんけれども、確実な史料をどれだけ普遍的な問題として社会に投げ出すことができるかという点では、展示というのは自分自身が試されているというふうな、それから研究なりを試されているということがあろうというふうに、しみじみ感ずるところがあります。

これは東大の総合図書館と地震研に、石本巳四雄コレクションというのがあります。そのコレクションの総合博物館のほうのものを、解説をして展示をするんですが、災害が中心ですので、災害そのものの説明は、地震調査研究センターの松浦さんにパネル化していただいて、分かりやすい説明にして、実物の解説をするというふうな展示を、総合図書館の3階みたいな所のケースを使ってやりました。それから同じ年なんですけれども、国土地理院にもう捨ててしまおうというふうに思ったらしい関東震災のとき陸地測量部が調査した、震災の焼けた所と橋が落ちたという所に印を付けた、当時の1万分の1の地図があるんです。地理院は、昔はあまり価値を認めな

かったらしいんですが、その価値が分かって、今は大事に保存されているんですけども、地理院とともに歴史地震研究会が、この地図と、それから当時の写真とか、その他のことを一緒にした展示をしました。廣井さんが最初に一緒に私とやってくださった江戸東京博物館の災害展示というのが、今は、だから30年くらい経っているんですけども、こんなかたちで受け継いで頑張っているということを皆さまにお伝えしたいし、廣井さんにも聞こえたらなというふうに思っているところです。

いまま昨日から神奈川大学で、関東震災の展示をしています。新たに絵巻が3巻見つかりましたので、当時27歳の日本画の絵描きが描いたものを中心にやっています。阪神の震災で、真野地区という所で震災体験をした人たちと一緒に、布を使って自分自身のいろいろな体験を、絵にかたちづくるということを指導した、武蔵野美術大学の及部先生という方がいらっしゃるのですが、その先生に最後お越しいたいて、学園祭の中でワークショップをやります。関東震災と言っても、学生はもう遠い昔のことで何も知らない。ただ関東震災というと、朝鮮人虐殺という言葉がすぐ出て来るようなかたちで、非常に寂しい反応です。朝鮮人虐殺も大変大きい問題だけでも、関東震災は、私はそれだけではない。もっと全体として震災を研究するという示唆がないと、教訓が生かせないというふうに考えています。学生にどれだけそういう絵を見ながら、何を感じたかを、何かのかたちで自分から吐き出してもらおうというふうなことをやりたいと思って企画して、どんなかたちになるか分かりませんが、そのワークショップは今月の31日にやる予定です。

以上、簡単ですけども、廣井さんから受け継いで、廣井さんと一緒にやってきたことが私の心に刻まれて、今こんなかたちでやっていますよということを、廣井さんと皆さまにご報告したかったということで講演に代えさせていただきます。どうもありがとうございました。

## ※ 2011年廣井賞について

2011年廣井賞候補の推薦を募っています。

### ① 表彰対象

原則として日本災害情報学会員、または会員の属する団体で、災害情報等の発展に著しい功績のあったもの。

### ② 対象功績分野

- 1) 社会的功績：災害の防止・軽減に貢献する災害情報への先進的な取り組み
- 2) 学術的功績：災害情報分野の学術の進歩・発展に貢献する独創的な調査・研究

### ③ 選考期日

推薦期限：2011年5月31日、選考結果：2011年9月、授賞式等：2011年10月29日 第13回学会大会にて（名古屋大学）

詳しくは、[http://www.jasdis.gr.jp/16hiro\\_i\\_prize/index.html](http://www.jasdis.gr.jp/16hiro_i_prize/index.html)にて。ご応募をお待ちしています。